

日本基督教団 下関丸山教会 会報

まるやま No.72 イースター号

2025年4月20日発行



会報まるやま 72号 目次

巻頭言『復活の主イエス』・・・・・・・・餅原研一牧師 3

『それを生きてみることに、歩いてみることに』・・・高山環 8
(信徒講壇日奨励)

『創立記念伝道礼拝』・・・・・・・・宮田四郎さん証し 16

『わたしの好きな み言葉』・・・・・・・・教会員有志 22

『写真で振り返る丸山教会の一年』・・・・・・・・26



『復活の主イエス』

聖書箇所…ルカによる福音書二四章一〜八節

下関丸山教会牧師 餅原研一

主なる神様のお守りと導きの内に二〇二四年度も、皆様のお祈りとご奉仕に支えられ、教会の宣教活動が行われたことを感謝します。

二〇二四年度はロシアとウクライナ、そしてガザとイスラエルの戦争が続き、また地震で被災された能登半島の人々が大雨の被害に遭い、山火事などの災害が各地で起きました。さらに物価高騰が国民生活を圧迫する社会状況の中で、私達の教会は感染症予防に留意しながら、通常の宣教活動を取り戻す年度となりました。礼拝や教会学校、祈祷会、バイブルクラス、クリスマス・パイプオルガンコンサートなどを行いました。さらにホルンとパイプオルガン



等の演奏による創立一二〇周年記念コンサートを開催しました。また分區や教区の会合などはオンラインで開催されることが多くなり、世界祈祷日や日韓合同礼拝と交流会は対面で開催されました。また教会音楽講習会が当教会で開催され、主にある良き交わりの時が与えられたことを感謝します。

さてイースター(復活日)は、イエス・キリストが十字架にかけられ墓に葬られ、三日目の日曜日に復活されたことを記念する日です。イースターは教会で最も重要な日と言えるでしょう。なぜならキリストが復活された日曜日に、イエスを救い主と信じる人々が教会に集い、復活のキリストを覚える礼拝が始まり、今日に至るまで礼拝が守られ続けているからです。キリストを信じる人々は復活という常識では信じられない出来事を真理と信じ、信仰を守り続け

ているのです。

イースターは毎年、春の季節に行われます。春は植物にとって待ちに待った季節でしょう。枯れたように見える木や姿を消した草花が、春になると一斉に芽を出し、眩いばかりの新緑や花を咲かせます。植物は冬の寒い間、枯れて死んだように見えても春に備え、しっかりと芽を出し、花を咲かせる準備をしていたのです。ですから春は新たな命の時、命を与えられる時、復活の時と言って良いでしょう。春、植物の驚くばかりの生命力を見て植物の背後で働く自然の力、神の力を感じる人も多いのです。また私達にとっても春は、新たな年度に変わる時期です。学校では入学式、始業式、会社でも入社式と、新たな人との出会いの時でもあります。そしてイースターも正に新たな命の時、新たな人生のスタートを覚える日なのです。教会ではイースターエッグを配りします。イースターエッグの歴史は古く、ヨーロッパでは中世の頃からイースターに作られています。今もヨーロッパではゆで卵一つ一つに筆で絵を描き綺麗に装飾する国があります。ではなぜイースターに卵

なのでしょうか。それは鳥が卵の殻を破って出て来る様子を、キリストが墓から復活した出来事に譬えたからです。

キリストが墓から復活された様子を聖書は次の様に書いています。二四章一節に「週の初めの日の明け方早く」つまり日曜日の朝早く、婦人達はすでに準備していた香料を持って急いで墓に向かいました。なぜなら前日の土曜日は安息日で、律法つまり当時の法律で安息日に墓参りは出来なかつたからです。婦人達は金曜日にイエス様が十字架に架けられた。その一部始終をまじかで見っていました。そして息絶えたイエス様が十字架から降ろされて、慌ただしく墓の中に納められた様子を見届けました。婦人達はその時、思ったことでしょう。愛するイエス様の傷ついたお体をもっと丁寧に香料で拭いて差し上げ、綺麗な亜麻布で包んで上げたいと。ですから、この時の婦人達の目的はお墓参りでした。この婦人達はイエス様が宣教活動を始めた頃から、一二弟子と共に従って来た人達でした。イエス様の神の国のお話しに心が慰められ、生きる希望を与えられて来た人達でした。またイエス様が行なわれた数々の奇跡に

驚かされ、イエス様の不思議な力を目の当たりにして、イエス様こそ昔から預言されてきた救い主メシアに違いない。イエス様こそ自分達ユダヤ人の王となられ、ローマ帝国の支配からユダヤ人を自由にして下さる方だと期待し、従って来たのです。そして一週間前の日曜日にはシユロの枝を手にした人々に歓迎されて、イエス様と一緒にエルサレムの都に入城しました。ところが一二弟子と一緒に最後の晩餐を終えたイエス様は、その夜、ゲッセマネの園で祈られた後、弟子達の目の前でイエス様を妬む祭司長達の手下によって捕らえられたのです。イエス様は無実の罪で逮捕されたのです。そしてイエス様は朝早くから裁判や尋問を受けました。当時としても異常な程のスピードで、十分な審議も尽くされず死刑の判決が下されたのです。イエス様は鞭打たれ茨の冠を被せられ、ひどい侮辱を受けた後、十字架に架けられ、苦しみの内に死んでしまわれたのです。そして律法の中に死刑囚の遺体は「その日のうちに必ず埋葬しなければならぬ」（申命記二二章二三節）と云う掟がありました。また翌日の土曜日は安息日でした。安息

日まで遺体が放置されることは赦されることではなく、急いで墓に葬る必要があったのです。安息日には働くことが禁じられていたからです。婦人達はイエス様と十分に別れを惜しむ間もなく、イエス様は慌ただしく墓に葬られてしまったのです。この婦人達は、イエス様が宣教活動を始めた頃からエルサレムに入城され、十字架に架けられ墓に葬られるまで従って来ました。婦人達は弟子達がイエス様を見捨て裏切って逃げた後も、イエス様の十字架まで尽き従って来たのです。そして安息日がようやく明けた日曜日の朝、日が出るとすぐに婦人達は急いで墓に出かけたのです。当時の墓は岩に掘られた横穴式で墓の中は四畳半程の広さがありました。墓の入り口は大きな石で完全に塞がれていました。その大きな石は婦人達の力だけでは、到底、動かすことの出来ない大きな石でした。しかし婦人達は兎に角、何が何でもイエス様の傍に行きたかったのです。行って墓の中に納められたイエス様の傷ついた体に香料を塗って、心から吊りたいという一心でやって来たのでした。ところが何と、墓の入口の大きな石はすでに転がされて開

いているではありませんか。ここで聖書は大切なことを教えています。それは自分の力では不可能だと諦めずに、神を信じ行動を起こす人は、神の恵みの奇跡を体験することが出来ると言う教えです。婦人達はイエス様の傍にいたいという一心で行動した結果、大きな石が転がされると言う奇跡を体験したのです。また、この後、さらに大きな奇跡を経験することになります。婦人達が墓の中に入ると、あるはずのイエス様のご遺体が見当たりません。イエス様を弔う為に来た婦人達は愕然としました。そしてイエス様のご遺体はどこに行ったのか、どうすれば良いのかと途方に暮れたのです。すると突然、輝く服を着た2人の神の御使いが現れました。婦人達は驚いて思わず地面に顔を伏せました。すると神の御使いは優しく告げます。「なぜ生きておられる方を死者の中にさがすのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」と。そしてイエス様ご自身十字架につけられ三日目に復活すると言われた言葉を思い出しなさいと告げられて、初めて婦人達はイエス様の言葉を思い出し、イエス様が本当に復活されたことを知ら

されたのです。そして一一節、婦人達は使徒達、つまりイエス様の弟子達にイエス様の復活を告げますが、人々は信じなかったと言うのです。この使徒達のように人はすぐに自分の経験を通して、自分の限られた常識で判断し、キリストの十字架と復活の出来事をたわ言と決めつけるのです。しかし人間はどれ程のことを分かっているのでしょうか。難病の成し方、戦争の終わり方、原発の処理方法、分からないことが沢山あります。人間のことを分からないのに、神のなさる業を全て人間に理解できる訳がありません。また目に見えない物にこそ、大切な物が隠されているのです。以前、ある生徒が、「先生は、キリストは今も生きておられると言うけど、神を見たことがないから信じない。」と質問する生徒に、「見えなくても存在する物はないの?」と聞くと、生徒は「携帯電話の電波、空気、心の中」と答えました。実は見えない物にこそ、大切な物が隠され



ているのです。聖書は神なるキリストは今も生きて働いて下さる。素直な心で見ると時に真実を見出し、キリストと出会うと教えています。しかし、あの婦人達のように多くの人が、生きておられる神を死者の中に捜しているのです。つまりお金や財産や家など、いつか朽ちて無くなる物、死者のように命のない物を頼り信頼しています。この世の財産は死んでまで持つて行けません。本当に大切に生きておられる神は、財産や自分に信頼を置く人には見えません。あの婦人達のように、この世の暗い墓の中に人生の目的を探すのを止めて方向転換するならば、復活のイエス様と出会えるのです。そして無くなることのない真実の希望を与えられるのです。神様と出会う為には、真理を求め続けることが大切です。真理を求め続ける一番の方法は祈ることです。祈りは人間だけに与えられた方法です。私達は今、携帯電話やインターネットで他の人と対話します。祈りは神様との対話なのです。聖書は祈れば神様はちゃんと聞いて答えて下さると教えています。祈る心は人間だけに与えられた神の恵みです。私達はこの世のことに、つい目が

き惑わされ、神様が私を愛しておられることを忘れて不安になります。だから神を思い出しなさいと教えているのです。聖書が教える神は罪けがれた、この世に神の子としての地位も名誉も捨てて、人間と同じ喜怒哀楽を分ける人として、この世に來られた。更に無実の罪で私達が受けるべき罪の罰を代わりに十字架上で受けて下さった。あのキリストの十字架の上に、私達への愛が現れているのです。キリストによって呪いの十字架が愛の十字架に変えられたのです。そして私達は教会で復活のイエス様と出会うことが出来るのです。なぜなら礼拝は日曜日のキリストの復活を覚える為が始まったからです。イースターの朝、私達に希望を与える復活のキリストに出会い感謝を捧げましょう。最後に「会報まるやま」に寄稿して下さいました皆様、そして編集を担って下さった富田一恵姉に感謝致します。新たな年度も、皆様と教会の上に、主なる神のお守りと導きが豊かにありますように、お祈り致します。

信徒講壇 十月十三日

『それを生きてみることに、歩いてみることに』

高山 環

私は今年六十三歳になりました。

丸山教会には私より年長の方が多くいらっしゃるのですが、私は比較的若手、若輩と言って良いのかも知れません。それでも還暦を過ぎるというのは老年期の幕開けらしく、五十代半ばからぼんやりと感じ始めた体のあちこちの小さな変調が、よいよ本格的なものに変わってきました。ちよつと前まで、固いものも平気でガシガシ噛んで碎いていた左右上下の奥歯が次々にぐらつき始めたときはかなりショックでした。首の骨、頸椎の一部が変形してしまい、そのせいで右腕の可動範囲が狭くなりました。これはいろいろな不便を引き起こすのですが、特に、背中がむず痒くなった時、その痒い場所に手が届かなくなるのはもどかしく、悩ましいことです。

人は年をとる・・・その事実を知らなかったわけではな



いはずなのに、まるで何も聞いていなかった、知らされていなかったかのように驚いています。どんな予備知識も、またそういう時がいずれ来るとある程度覚悟していたつもりでも、自分の身体を実際にみまうこの変化を前にしては、そんな知識も覚悟

もたいて役に立たないようです。私たちはいつだって、今を生まれて初めて生きている、十代の自分、二十代の自分・・・そして今は六十代の自分を、初めて生きています。そしてそのこと、現在の一瞬一瞬を初めて生きているということを強く実感したのは、私の場合、記憶力や体力、持久力など何もかもが下降線をたどり始めた時でした。

どうしてこんなことを言うのかというと、この経験して初めて分かるということ、それを生きてみて初めてそれが何なのかを知らされるということ、それと神様を信じる信仰とが私の内で重なった・・・そんな風に感じられたからです。

私は高校二年生の夏休みから丸山教会に通うようになりました。学生時代、男女を問わず、多くの同年代の仲間と共にこの教会でにぎやかに、楽しく過ごさせていただきました。

その頃の私たちは若くて、生気だったり、無作法だったり、当時の牧師先生をはじめ、教会の皆様にもいろいろ迷惑をおかけしたと思いますが、丸山教会はお日様の光が降り注ぐ、暖かい苗床のような場所で、教会の方々はいつも私たちの成長を優しく見守り、寛大な心で接して下さっていました。その頃のことを思い返す度、今でも感謝の思いが胸にわきあがります。

私たち青年会はノアの会と名付けられて、バザーで喫茶をしたり、亀の里にキャンプをしに行ったり、夏に教会泊まり込みで修養会を開いたり、意欲的に様々な活動をしていました。ノアの会のメンバーから受洗者がたくさん出たことも、その時代、私たちの心のいかに大きな部分を教会が占めていたか、実際の生活においても教会と深く関わっていたか、そのことの確かな証しであったと思います。

私たちは受洗へと導かれる前から聖書の勉強会などを度々もち、皆自由に、思いつくまま信仰や神様に関する自分の感じ方、考え方を語り合っていました。例えば、神様って本当にいるんだろうとか、神様を信じるってどういうことなんだろうとか、そんな青年らしい問いも互いによく投げかけあいました。また私たちはたまたまこうしてキリスト教の教会に来ているけど、キリスト教でなきゃいけない理由ってあるんだろうか、イスラム教ではいけないのか、仏教ではいけないのかということが話題になったこともありました。キリスト教もイスラム教も仏教も、人がより良い人生を生きる、その術を教えているのだから、その教えにそんなに大きな違いがあるんだろうかと思っただけです。高校で世界史の授業を通して、宗教戦争の歴史を学び、現代においても、宗教の違いから生まれる紛争、差別などの様々の問題をニュースを通して知らされるので、そういう方向に話が向いていったのだろうと思います。その時一人の女の子がこんなことを言いました。

「私はこんな風に聞いたことがあるんだけど・・・宗教を

信じるって、ひとつの高い山に登ることに似ているんだって。でもその山にはいくつも登り口があって、キリスト教の登り口、イスラム教の登り口、仏教の登り口、他の宗教にもその宗教の登り口がある、でもどの登り口から登っても、その道を一生懸命登っていけば、皆ひとつの同じ高い頂に出るって。」

彼女が言ったこと、どの宗教も一つと同じ山のとっぺんを目指しているというのは分かりやすいイメージですし、そうか、だから宗教が違うからといって争い合うことは意味の無いことだよね・・・という感じで皆がまあまあ納得しながら彼女が言うことを聞いていたような気がします。

今、六十代の私が思うこと・・・それは、キリスト教もイスラム教も仏教も皆、それぞれの道を歩みながら、最終的には同じ高みに出ていくというのは、ひよっとしたら真実かも知れないけど、一人の人がその一度きりの人生の中で、自分の経験を通してそのように納得することができるだろうか、生まれてから死ぬまでに、キリスト教もイスラム教も仏教も信じ、その結果は一つの同じ高みであったと知る・・・というのとは不可能だろうということです。

これはあくまで私個人のこと、そうではない人もきっといたと思いますが、私自身について言えば、若い時代には神様のことを、ものすごく尊い存在と思っていたことは間違い無いのですが、人が頭で考えて理解できる範囲の中に無理やりに神様をおさまらせようとしていた、そんな気がします。それは自分がまだ若くて経験が乏しく、そこからこそ神様を見つめる自分自身の中身、実質と言えるようなものがまだ無かったからだと思いを返しています。

私は教会学校のスタッフの一人で、日曜日の朝九時からの教会学校の礼拝に他のスタッフの方々、中学生、高校生と共に出席しています。餅原先生、岡野さん、餅原恵美子さん、そして中野新治先生にもお手伝いいただいて、順番で礼拝の中のお話を担当していて、月に一度、お話の当番が回ってきます。教団の出版局が出している「教師の友」という季刊誌が指定する聖書の箇所に基づいてスタッフが生徒にお話をする、そんな形がずっと長い間続いています。自分が聖書の箇所を選ぶのではなく、本が指定するのですが、私は毎回の聖

書箇所を、神様が与えて下さった、その時、その時の私にも
つとも相応しい箇所という風感じていて、今月ほどの箇所
が与えられたのだろう・・・と本を開くのを楽しみに感じる
こともあります。お話を考えるのは難しく、苦勞することも
多いですが、だからこそこの時ばかりは真剣に聖書を読み、
「教師の友」からヒントをもらいながら一生懸命に話を組み
立てます。スタッフでなくなったら、私が聖書を読む時間は
きっと相当少なくなるだろうと思います。

さて私がお話当番を務めた昨年のある週、マルコ福音書十
二章二十八〜三十四節が与えられました。そこを本日の聖書
箇所選ばせていただきました。私はこの箇所についてこん
な風に教会学校の生徒さん達にお話しをしました。

今日の箇所には掟というものが出てきます。掟というのは
守らなくてはならない決まり、法律のようなものです。イエ
ス様が生きていたユダヤの社会では、たくさんユダヤ教の
掟がありました。その中で一番大切なものは何かと律法学者
がイエス様に尋ねます。するとイエス様が一番大切な掟とし

て、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし
て、あなたの神である主を愛しなさい。」と言われました。

「・・・を尽くす」というのは、それを全部使いきる、ある
だけ全部出す、惜しまないということです。心を尽くすと言
えば、心のありったけで、精神も思いも力も皆、それら全部
を惜しまず使って神様を愛しなさいということです。

この後律法学者はイエス様の前に進み出て、「先生、その通
りです。あなたの言われることは正しい」と言います。律法
学者は律法を人々に教える学者です。律法学者は「心を尽く
し、知恵を尽くし、力を尽くして、神を愛することは、他の
どんな献げものより素晴らしい」と言いました。え？でもち
よつと待って下さいね。ちよつと注意してイエス様が言われ
たことと律法学者の言葉とを見比べてみましょう。イエス様
は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし
て・・・」と言われたけれど、それに対して律法学者は「心
を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして・・・」と言ってい
ます。イエス様が言った「精神」「思い」という言葉は無くな
って、それに代わって「知恵」という言葉を律法学者は使っ

ています。そのような律法学者に対してイエス様は、「あなたは神の国から遠くない」と言われました。これも何だか微妙な言葉です。イエス様はなぜ「あなたは神の国にいる」と言われなかったのでしょうか？なぜ「遠くない」なんて中途半端な言い方をしたのでしょうか？イエス様は、ひよっとしたら律法学者の言葉に何か物足りないものを感じたのではないかなと思います。

神様を愛するのに、精神と思いを尽くすというのと、知恵を尽くすということとの違いって何なのではないですか？ イエス様が言われた「精神」はもともと旧約聖書の言葉では「魂」のことなのだそうです。だから、「精神を尽くして愛する」と言ったら、それは「魂のありっただけで愛する」ということになります。では「魂って何ですか？」という問いが生まれてきそうです。人間の体が死んでも魂は死なない、滅びないと聞いたことがあります。そうだとすると、魂とは、生きている私たちも死んでいる私たちも含んだ私たちの全部ということでしょうか。その魂の全てで神様を愛しなさいとイエス様は言われています。それに対して律法学者は、やはり

学者だからでしょうか？それを「知恵」に代えてしまいました。知恵を出すとか知恵を絞るとか言うのと、それは頭で考えて何か妙案をひねり出すことを意味しています。でも私たちはあまりに頭で考えると、迷い始めないでしょうか？ その時その時のいろいろな事情、自分にとつての損得とかを考え始め、そのために余計な思い煩いが起こってくることもよくあります。何より、知恵は私たちの全てではありません。私たちの体は頭だけで成り立っているのではないですよ。手も足もあります。食べたものを消化する胃袋だって私たちの一部です。そして魂は、私たちが生きていても死んでしまっても滅びることのない私たちの全てです。

若松英輔さんという方がおられます。文芸評論家で、詩人でもある方ですが、学生時代の終わりごろからノイローゼになり、お医者さんに神経症と診断されました。若松さんは卒業後社会に出ていくことが怖くなり、引きこもりに近い状態になったということです。それでも若松さんはカトリック教会につながっていて、井上洋治神父さんの新約聖書を読む集いに参加していたそうです。その集いで、苦しんでいた若松

さんに井上神父さんが何を言われたか、そのことが若松さんのエッセイに書かれているので、その箇所を紹介させて下さい。

ある日その場で、出口を失ってどうにもならない心情を、そのまま吐露した。

聖書のどこを読んでも自分は光を見つけれない。そればかりか自分が救われないことだけがはっきりしてくる。そう語り、矛盾したことが述べられている箇所を挙げ、数十分にわたってひとりで話し続けた。すると、だまって聞いていた師（井上神父）が、こう言ったのである。

「今日はとてもすばらしい話を聞かせてもらいました。ありがとうございます。しかしひとつだけ感じたことがある。信仰とは頭で考えるのではなく、生きてみることでないだろうか。知ることではなく、歩いてみることでないだろうか」

この一言が私を変えた。その日からゆっくりと病は

癒え始め、しばらくして、文章を書くようになった。病がなければ、こうして言葉を紡ぐ仕事に就くこともなかっただろう。

若松さんは引きこもりに近い状態になるぐらい病に苦しみました。その経験があったからこそ文章を書く、言葉をつむいでいる自分が現在いると言っています。言葉に鋭敏で、他者の思いを繊細に感じとる若松さんが書く文章は、自分の内に悲しみを抱えているひとの胸を強く打ちます。そんな若松さんの出発点に神父さんの言葉があったことにも胸を打たれるのですが、何より神父さんが言われたこと「信仰とは頭で考えるのではなく、生きてみることでないだろうか。知ることではなく、歩いてみることでないだろうか」という言葉を、イエス様が言われた「精神を尽くし、思いを尽くして愛する」に重ねてみたのです。

以上のようなことを教会学校の礼拝でお話したのですが、ここでもう一度この奨励に帰らせて下さい。若松さんのエッセ

セイの先ほどの引用箇所を初めて読んだ時考えたこと、それは神父さんが言われた、「生きてみることに、歩いてみることに」を、私はしてきただろうかということでした。これまで神様を信じながら生き、歩いてきただろうかと自分自身に問うてみました。(胸に手をあてながら) 敬虔なクリスチャンなどでは全くないし、いたらない、欠けたところばかりの者ですが、高校生時代に神様に導かれてこの教会に繋がりに、ここで多くの人と出会い、六十代の今もこうして繋がりが続いているというその限りにおいて、私は一応、神様を信じながら生きてきた、歩いてきた、ここでそう言わせていただくことをお許し下さい。

キリスト教もイスラム教も仏教もすべて、それぞれの道を歩みながら、最後には同じ山の頂上、同じ高みに出ていくという考え方があるということを言いました。哲学者や宗教学者のような人達が、神様という存在を追い求めた結果、そういう結論にたどりつくということはあるかも知れません。でも生活する者として、生活の中で、生活そのもののように神様を思う者にとっては、その考え方はどこか観念的な気がし

ます。山の頂上の神様というのも何だか遠い感じですよ。神様はゴール、高みにだけおられるわけではない、頂上に向かう途中の道筋にもずっと神様はおられるのではないかと思ってしまうよ。

精神を尽くして愛するとは魂のありついで、つまり自分の全てで愛するということだと言いました。それは知恵で、頭だけで考えて愛するのとは違うのだと学びました。神様はどのような方かという問いに対して、知的で立派な解答はたくさんあり得るだろうと思われます。でも、もしその答えが示す神様から、日々の生活の中で神様を愛する私たちの、私たちが私たちであるための実質、信じて生きている私たち、歩いている私たち、私たちの全て(！)が抜け落ちていながら、その神様は私たちにとって、血の通わない、冷たい像のような、どこか遠いところにいる神様のように思えます。でも私たちの神様とはいつも私たちに寄り添って下さる神様ですよ。

昔の私がもう一度よみがえってきて、「神様ってどんな方だと思ってる？」と現在の私に尋ねてきたら、私は何と答えるの

でしょうか？これは現在進行形で続いている難問です。でも信仰が、頭で考えることではなく、それを生きること、歩いてみることであるなら、私は自分の命が終わるまで、この問いへの最終的な答えは与えられないということかも知れませんが、ではついに終わりの時がきたら、答えは与えられるでしょうか。

丸山教会には、この点に関しても希望を与えて下さる良き信仰の先輩がおられます。私たちが敬愛する末松明さんのことを最後に紹介させて下さい。末松明さんは二〇一二年二月十七日、今から十二年前にご病気で天に召されました。ご生涯を通して神様を愛され、その賜を教会に捧られ、信仰熱心な信徒として生きられました。教会の祈禱会で奥様の末松洋子さんから末松さんの最期がどのようなかをお聞きしたことがあります。末松さんは亡くなられるその直前に「ああ、イエス様の顔が見える」とおっしゃったそうです。イエス様の顔が見える、その言葉を二度繰り返し返され、それから洋子さんと最期のお別れをなさって旅立たれたとのことです。

信仰は生きてみることに、歩いてみることに、歩き続けたら、最後にイエス様は、神様はお顔を見せて下さるのかも知れない、そのような希望を与えてくださる信仰の先輩に感謝しながら、私自身もまた終わりの日まで神様を愛し、神様がいつも私のそばにいて下さることを喜び、感謝しながら歩き続けることができたらと願っています。



創立記念伝道礼拝 十一月十七日

丸山教会の創立120周年を記念して、ホルン奏者の宮田四郎さんにお越しいただき、礼拝での証しと、ホルンでの演奏、また午後には地域の方をお招きしてコンサートを行いました。以下、宮田さんご自身が「私の体験談」としてまとめられたものを掲載します。

宮田四郎さんプロフィール

東京芸術大学卒業、第35回日本音楽コンクール第1位入賞。ドイツ留学。NHK交響楽団や東京交響楽団でホルン奏者。東京芸大、国立音大、玉川大学で講師、昭和音大で准教授などを歴任してきたが、現在は自由な立場で全国各地のキリスト教会での奉仕を第一にしている。



私の体験談 宮田四郎（ホルン奏者）

***小学生の時**、近所の教会の日曜学校に何回か通ったことがあります。高校時代にはマルクス主義とフロイト心理学に真理を求めていました。高校3年の時、60年安保反対運動では、全学連と一緒にデモに行つて、本気で革命を夢見ていました。

***20才前後**、東京藝大2年生の時、座禅とヨガを中心とした自己鍛練の道場に通い、東洋的な思想と悟りを求めました。そこで自分なりに得た納得は「座禅での悟り、とは自分が無になると、宇宙のエネルギーに溶け込んで、無限の宇宙と一体になる」という事でした。

***東京藝大を卒業した年の秋**、第35回日本音楽コンクール、当時は4年に一度の金管楽器部門で1位入賞して、幾つかのオーケストラから入団の誘いがありました。が、うまく話がまとまらず、1年半後にNHK交響楽団ホルンパートに欠員ができて、誘いがあつて入団しました。

***ホルンとオーケストラ**、どちらも典型的な西洋文化の産物ですが、自分は日本人である、というこだわりから、禅宗の寺で仏前結婚式を挙げました。東洋人には東洋人のための宗教があり、キリスト教は西洋の宗教なのだ、と信じていたのです。

***5年間N響でホルン奏者をした後**、妻と幼い二人の子を置いて、単身ドイツに留学しました。東洋の思想、宗教に悟りを求めていた私には「日本人にとってヨーロッパの音楽をどれだけ正しく理解して演奏できるのか、異なった文化をどれだけ理解し合えるのか？」という疑問がいつもあり、その解答を得るために色々な国の人たちと付き合い、仲良くなることができました。そんな日々のある時、ポスターで知ったキリスト教伝道集会に行ってみました。そこで声を掛けてくれたドイツ人家庭での聖書集会に毎週参加することになり、日曜学校以来、20年ぶりに聖書の言葉に触れました。と言つても、全部ドイツ語でしたので言葉の理解が何とかできて、とても信仰には結び付きませんでした。10人弱の家庭

集会でしたが、牧師は居なくて、色々な年齢と職業の人たちが来ていました。そこで、クリスチャンの祈りの雰囲気に触れて、何か大きな愛が彼らにあることを感じました。そのように、人種を超えた学生同士の付き合い、そして、職業、年齢を超えたドイツ人クリスチャン達との付き合いをおして、人間は人種、国籍が違っても良く理解しあえる存在だという結論に達しました。

***そうすると、西洋のキリスト教、日本では仏教と信じていたが**、洋の東西、そして民族を超えた共通の真理、救いの道があるのではないか、という思いに至りました。

***32歳で留学を終えて帰国して**、東京交響楽団に首席奏者として迎えられました。そして、ドイツ人クリスチャンとの文通を続け、また新宿の街角のポスターで知った「般若心経と聖書の研究会」にも参加して真剣に求道しました。さらに、大きな神様の導きは、当時、東京交響楽団で同僚のチェリストで宣教師である、ベアンテ、ポーマン氏と親しくなり、彼のメッセージによる家庭集会にも参加して、奥様の日

本語通訳で聖書理解を深める事ができました。そして、般若心経と聖書の研究会での理解と合わせて、イエス・キリストこそ、歴史的事実として現われた真の救い主であり、仏教での悟りや「南無阿弥陀」の境地もキリストの福音によって到達できるという解答を得ることができました。つまり、阿弥陀とは、辞書にもあるとおり、無量光、無量寿＝永遠の光、永遠の生命の事で、私は永遠のエネルギー、つまり創造主の事ではないか、と結論付けました。そして創造主なる神が人間として現れたイエス・キリストに帰依（＝南無）して、信じて従えば、南無阿弥陀となる、という事です。さらに、イエスの復活は大勢の目撃者によって伝えられた歴史的事実です。天地創造の神の御業によるもので、現在の人間の科学では説明できませんが、多くの科学者や医者がイエスの復活を信じています。もしイエスの復活が事実でなければ、キリスト教は成立していません。大勢の目撃者が自分もイエスに従えば復活して天国へ行ける、と言う確信があるので、迫害、殉教を恐れずにイエスの復活と教えを伝えて、世界中にキリ

スト教会が成立しました。これこそ信ずるべき歴史的事実です。

***このように、先ず、理屈で信じた、という変わり者で、**毎月開かれていた、般若心経と聖書の会とポーマン氏の家庭集会に通っていましたが、教会には行きませんでした。ところが、ある時、ポーマン氏のコンサートがきっかけで自宅近くの座間キリスト教会（現在の大和カルバリーチャペル）に初めて行って、それから家族全員で、礼拝と祈禱会に、ほとんど毎週通い始めました。そして祈りを通して、自分の罪が分かり、洗礼に至りました。

***教会に通う数年前から、私達夫婦は子供が大好きで、何か社会の為になる事をした、という妻の提案で神奈川県認定の里親になって、二人の実子の他に、家庭に恵まれない子供たちを一定期間引き取って育てていました。妻はそんな経験を通して、人間の愛では不十分、ここに神の愛があれば、**と言う思いで私に従って、夫婦一緒に受洗しました。（19

82年8月）

***その2年後、実母が出産時**に出血多量で他界した女兒を我が家の3番目の子供（戸籍上の次女）として引き取り、里親活動に終止符を打ちました。

***その末娘は**、自分の生い立ちを知って悩み、また、生みの親が自分の出産で亡くなった事で不安がありました。34歳で無事に男子を出産しました。そして「可愛くて仕方がない。この子の為なら命も惜しくない。私達の為に死んでくださった、イエス様、神様の愛が分かるような気がする」と言っています。（2018年4月）

***受洗してから**、むやみに欲しがったり、妬んだりする思いつから解放され、仲が悪くなって、憎らしかった友人とも不思議なように仲直りできました。またある時、電車の中で隣に座った青年のマナーの悪さを注意したら、反論されて、怒りの気持ちでいっぱいになりましたが、すぐに「あなたの隣人を愛しなさい」という聖書の言葉が頭をよぎりました。そのとたんに、私の怒りは消え去り、その青年が自分の息子のように可愛く思えてきました。そして、その青年に「君は将

来有望な青年に見えるから、車内マナーについて言ったのですよ。ではさようなら、お元気で」と言って先に電車を降りました。

***イエス・キリストは弟子たちに「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」**（ヨハネ8：32）と語っています。仏教を通して、理屈から信仰に入った私ですが、真理は理屈ではなく、悔い改めと祈りを通して霊的に悟ることができて、それによって、妬みや憎しみなどのような罪の思いが取り除かれ、自由にのびのびと生活できる、と言ううことを体験できました。

***洗礼1年後のある夜、夢を通して**、はっきりと「ヨエル書を読みなさい」と何回も示され、角笛から發達した楽器、ホルンを吹き鳴らして、主の日が近い事を知らせるのが、私の使命だと、確信しました。「（ヨエル書2：1）シオンで角笛を吹き鳴らし、私の聖なる山で鬨の声をあげよ（中略）主の日が来るからだ。その日は近い。」

***そして、その後また、夢を通して、**「イエス・キリストの御名によって、聖霊を受けよ」という声を繰り返し聴いて、身体中が燃え上がるような体験を得ました。夢から覚めて現実の生活の中でも、大きな喜びと力が与えられ、しばらくの間は何をやっても最好調で、感謝の日々が続きました。若い頃、信奉していたフロイト心理学、精神分析では説明できない夢、まさに、神からの啓示でした。

***しかし、このような体験と自分の音楽家としての経歴が誇りとなつてしまい、それが、気が付かない罪になっていました。**ある時は交響楽団の定期演奏会で「クリスチャンだから、格好良く演奏するのだ」などと思いがつて、大失敗をしました。その後、自分自身で体験した失敗と試練とおして、キリストの十字架の苦しみは私の為であり、私は一方的な神の愛によって救い出された、という事を再確認することができ、次のような悔い改めの祈りをして、大きな平安と喜びに満たされました。「主よ、私は音楽家としてのプライドを罪として悔い改め、捨て去ります。どうか気付かなかつた

この罪を許して下さい。もう一度献身の思いを新たにしています。経歴も地位も能力もあなたに捧げますのでそれらが傲慢の罪の原因になるようでしたら、どうか捨て去って下さい。あなたに愛されて、罪許され、生かされているだけで充分です。もし、私の演奏があなたのお役に立てるようでしたら、どうかそれを再び用いて下さい」

***その後、交響楽団を退職し音楽大学の准教授になり、更にそれも退職して年金生活者となつてから、全国各地の教会に呼びかけてボランティアとしての音楽伝道活動をしています。**そこでは演奏の合間にこのような体験談を入れて、神様の大きな愛とご計画を伝えています。そのおかげで、金銭には替えられない大きな祝福を頂いています。例えば、楽器をうつかり落として大きくへこましてしまった。修理屋に頼んで見た目はきれいに元通りになりましたが、楽器の性能がかなり落ちる、と言うのは物理的な常識です。ところが、何故か、少し吹きやすく、良くなつてしまいました。その他、多くの不思議な祝福を頂いています。

*とは言え、ホルンという楽器が持つ特有の難しさ、人間的な能力の限界などを感じて、もっと私に力を与えてください、と真剣に祈ったことがありました。そしてその祈りには、すぐにこの聖句によって、答えが与えられました。「私の恵みはあなたに対して十分である。私の力は弱いところに完全にあらわれる」(Ⅱコリント12:9) *また、練習し過ぎが原因で、唇と顔面の筋肉と神経の不具合が起こり、再起不能かと思われるような演奏不調になった経験が何回もあります。そして最近はその年齢的な限界に近付いているようですが、弱い所に働く神の力に依り頼み、どんな事でも「すべてが益となる」(ローマ8:28)という事を信じ、現在に至っています。(2024年8月21日に82歳)



パイプオルガンで伴奏をしていただいた水野みのりさんに心より感謝いたします。

わたしの好きなみ言葉

教会員のみなさまに、好きな聖書の箇所とその理由をおたずねしました。ご協力に感謝します。

○ 岡野千代子さん

マタイによる福音書6章34節

「明日のことを思いわずらうな。明日のことは明日自身が思いわずらうであらう。一日の苦勞は、その日一日だけで充分である。」

この聖句は、優しい、心強さ、また希望が与えられるみ言葉として、神の愛を感じます。神は、私たちがどんなに疲れていても、苦しみや悲しみ、迷いの中にあっても、いつも寄り添い希望を与えてくださいます。日々、神に感謝しつつ歩み続けたいものです。

○ 兼田清さん

ローマの信徒への手紙11章36節

「すべてのことが神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に栄光がとこしえにありますように、アーメン。」

パウロの頌榮の言葉です。ここ最近はこのみ言葉を口ずさんでいます。力がわいてくる、うれしいみ言葉です。パウロがこのみ言葉に到達した過程を黙想し歩む幸いに感謝です。聖書研究の学びはよろこびです。シャローム。



○ 高橋宏子さん

テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5章16～18節

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」

覚えやすいので若い時からずつと心に残る聖句ですが、年を重ねるごとに、実行するのはとても難しいと痛感しております。なんとかこうありたいと願いつつ今を生かされている日々です。

○ 高山環さん

使徒言行録16章11～15節（14～15節を記載）

「テイアテイラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでし

たら、どうぞ、私の家に来てお泊りください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。」

後のパウロの宣教を物心両面から支えたというフィリピの人々に、パウロが初めて出会う場面です。とりわけ信仰心に厚く、ひたむきな女性リディアが、川岸でパウロから洗礼を授かる光景は印象的で、憧れを感じずにはいられません。

○ 富田一恵さん

マルコによる福音書9章23～24節

「イエスは言われた。『『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる』その子の父親はすぐに叫んだ。『信じます。信仰のないわたしをお助けください。』」

最近、私に突き刺さっている聖書の箇所です。不安や怖れを感じている時、祈ることさえ忘れていきます。そんな時「できれば、と言うか」というイエスの声を聞くように感じます。その声は、厳しくなく、あきれたような優しい声なんです。

○ 中野新治さん

マタイによる福音書8章23～26節

「イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、『主よ、助けてください。おぼれそうです』と言った。イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ』そして起き上がった。風と波をお叱りになると、すっかり凪になった。」

どのようなことがあっても神を信頼して歩み続けられるかが問われています。嵐によって押し寄せる波とは、思いを超えた出来事によって波立つ自分の感情です。キリスト者として歩むとは、常に神に問われ続ける道を歩むことではないでしょうか。



○ 中野直子さん

マタイによる福音書6章25～34節(33～34節を記載)

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

古希と言われる年齢になりましたが、いまだに明日のことを思い煩い、つい、不安定な気持ちになってしまいます。神様の深い御心を信じ、今与えられている恵みに感謝し、今日一日をたいせつに思いを込めて過ごしていけたらと願っているところです。



○ 餅原恵美子さん

コリントの信徒への手紙Ⅰ 13章13節

「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

私の教会生活の中で大切にしたいことは、イエスさまへの信仰と希望と愛だからです。

○ 餅原研一牧師

詩編37編5節

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」

2018年9月4日、非常に強い台風21号が近畿を直撃しました。帰省し大阪の実家と自宅のあまりの悲惨さに衝撃を受けました。下関に帰るフェリーで落ち込んだ私に妻がメールで、この聖書のみ言葉を送ってくれ、大いに慰められ励まされたからです。



創立記念伝道礼拝（11月17日）



クリスマスパイプオルガンコンサート（12月8日）



クリスマス礼拝集合写真（12月22日）

写真で振り返る 丸山教会の一年



総会を終えて（4月28日）



花の日礼拝（6月9日）



永眠者記念礼拝の後、愛餐会にて
（11月3日）



『編集後記』

富田一恵

今年も「会報まるやま イースター号」を発行できましたことを感謝します。今年の表紙はクリスマスの頃の礼拝堂の写真を加工したものです。

小さなクリスマスツリーの木が見えるでしょうか？

我が家の庭から運ばれてきれいに飾られて、パイプオルガンのすぐ側に置かれました。得意そうにしています。

クリスマスが終わるとまた我が家の庭に戻ってきました。

イースターを待つ浅い春の頃、クリスマスツリーの木は、パンジーのお姉さまがたを相手に自慢話をしています。

「ぼく、教会つとところに行つてたんだよ。みんなが、ぼくをきれいに飾ってくれたんだ。きれいな音楽を聴いたよ。そしてイエスさまつて方の話を聞いたんだよ。ねえ、パンジーのお姉さんたち、イエスさまつて知ってる？」なんて声が聞こえるようです。



会報まるやま 72号 (イースター号)

2025年4月20日発行

〒750-0019 下関市丸山町 4-1-8

Tel/Fax (083)222-5931